

社会 PB232

自尊心が集団評価に及ぼす影響について

- 中学生を対象として -

波岡 孝子

(埼玉大学大学院 教育学研究科)

目的

自尊心の高い者は低い者と比較して、自分の能力が他人よりも優れていると考える傾向が強い。このことから、自尊心を維持・高揚させるために、自己評価が正確に行われないことがあることが明らかになっている (Shrauger, 1972; Campbell & Fairey, 1985; 田中, 1992)。自尊心が評価に影響を与えるという研究は、これまで自己との関連でしか扱われてこなかった。それでは、集団との関連で考えていくとどうなるのだろうか。本研究では、内集団 (被験者が所属する集団) と外集団 (被験者の所属しない集団) に対する評価が自尊心の高さによって影響を受けるかどうかを明らかにする。特に他者と比較すること (社会的比較) によって自己認識を深めていくことが多い青年期、その中でも本研究では特に集団の力の影響を受けやすい中学生を対象として実験を行う。

方法

被験者: 埼玉県内の中学生72名 (男子36名, 女子36名)。性別ごとに6人1組の集団を作る。ただし、回答用紙に不備のあった2名 (男子1名, 女子1名) については、分析の段階で除外した。

手続き: ①自尊心尺度の実施: Rosenberg の自尊心尺度 (星野, 1970) を4件法で回答させた。

②集団討論の実施: 6人1組の集団を、内集団と外集団の2つに分けた。各集団ごとに討論を通じて1つの意思決定をさせた。課題は1つのグループが砂漠でのサバイバル、もう1つのグループは真冬の原生林のサバイバルであった。生き残るために必要と思われる12のアイテムが用意されており、これらを必要性の高い順に並べさせた。

③集団評価: 内集団、外集団双方の意思決定の質を、形容詞を用いた評価尺度 (7件法) で両集団の被験者に回答させた。なお、外集団に関しては、意思決定に関する情報を与えた。そしてそれは、論理的に馬鹿げていると判断されるよう実験的に操作した情報であった。

結果と考察

自尊心尺度: 自尊心尺度の合計得点 (10-40点) の平均値 (標準偏差) は26.01 (4.00) であった。なお、性別を見ると、男子27.17 (3.59), 女子24.86 (4.16) で、

男子の方がより高い傾向が見られた ($t=2.49, p<.05$)。このことは、女子の方が自己批判的であるという従来の知見と一致している (例えば、加藤, 1977)。

評価尺度の構成: G-P分析を行った結果、「よく考えている」「さえている」「かしこい」「使える」「ぴったりしている」「工夫している」の6項目が残され、それによって評価尺度を構成した (7-42点)。

自尊心と評価の関係: 2 (自尊心の高低) × 2 (内集団評価と外集団評価) の分散分析の結果、内集団・外集団の主効果 ($F(1, 68)=69.76, p<.01$)、交互作用が有意であった ($F(1, 68)=10.49, p<.01$)。前者は、外集団に対する評価よりも内集団に対する評価が有意に高いことを示す。つまり、自尊心の高い者ばかりでなく低い者も有意に内集団を高く評価したことが注目される (高自尊心群: $F(1, 68)=61.87, p<.01$; 低自尊心群: $F(1, 68)=14.30, p<.01$)。後者は、外集団評価において自尊心の高い者の方が低い者よりも有意に低く評価したことを示す ($F(1, 136)=5.61, p<.05$)。このことから、自尊心は自己に向けられる感情であるにもかかわらず、外界にある集団の評価にも影響を及ぼすことがあるという結果が得られた。この結果は、外集団と自己評価領域の拡大及び自尊心の関係を示唆するものであり、今後検討すべき課題である。

なお、自尊心得点に性差が見られることから、性別

による影響があるかどうかを明らかにすることを今後の課題としたい。さらに対象を青年期全般に広げ、年齢によって自尊心が集団評価に及ぼす影響に違いがあるのかどうかを発達の的に検討していきたい。

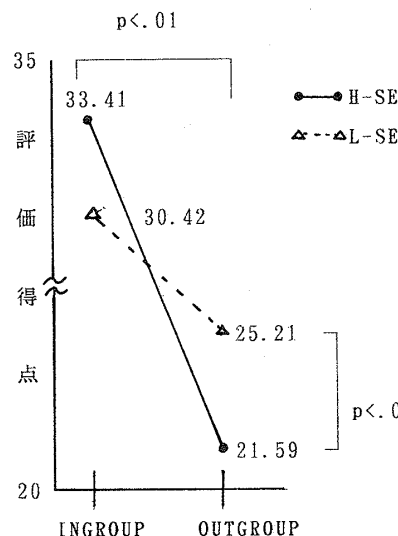


図1 自尊心と評価の関係